

# essay

## 「池内」での出会い

関西学院大学社会学部教授 阿部 潔

池内記念館には、かれこれ四半世紀近くいたことになる。そこで過ごした長い年月をふりかえるとき走馬灯のように思い浮かぶのは、不甲斐なく日々を過ごしていた自分自身の来し方でも、色々とお世話になった方々への感謝でもなく、不思議なことに折々の機会に目にした生き物たちとの出会いである。

### 春の使者

上ヶ原キャンパスの桜の美しさは、つとに名高い。だが、その一ヶ月ほど前、池内記念館前の日本庭園では嬉しい光景が毎年楽しめた。冬眠から目覚めた亀が動き始めるのだ。甲羅にこびりついた白濁色の泥は、長かった冬を感じさせる。気持ちよさそうに半目で甲羅干しする姿を眺めていると、桜より一足先に春の訪れを感じられた。このカメの種類は、おそらくミシシippアカミミガメ。しばらく前まで公園や神社境内でよく目にした。もともとは祭りの夜店などで売られていた小さなミドリガメ。だが、今ではどこの池でもほとんど見かけない。「特定外来生物」に指定されたからだ。幸い日本庭園でも新月池でも、元気な姿に今でも出会える。

### 親子カモの旅立ち

大型連休も明け、夏の訪れを感じさせる季節を迎えたある日のこと。一階の研究室の窓に何かぶつかる音がした。驚いて目をやると、大きなカモがこちらを睨みつけるように地面に佇んでいた。その横で子ガモが列をなしている。口の字型をした池内記念館の中庭には、小さな池がある。だが建物に囲まれているので、上(空)から入れても横(地上)からは出られない。母ガモは、無事に孵って元気に育ち始めた子ガモを連れてあたりを徘徊したものの、出口が見つからず業を煮やして「開けてくれ!!」とばかりガラス窓に体当たりを試みたのだろう。必死の訴えを受けて、仕事もそこそこに放り出し、管理人さんと相談して中庭と廊下をさえぎるガラス戸を開けて外に出られるようにした。最初は戸惑っていた親子カモも、やがて列をなして仲良く旅立っていった。このささやかな人間によるアシスト業務は、管理人さんとの密かな年中行事と化し、建物が解体される今年度の夏まで続いた。カモ一家の旅立ちは、いつも容易ではなかった。カラスやイタチに襲われるので、10羽ほど生まれる子ガモのうち無事生き残るものはごくわず

かだ。愛くるしいだけでなく自然の厳しさも教えてくれた親子カモの旅立ちに十年以上にわたり立ち会えたのは、本当に幸運だったと思う。

### 蛇の安息日

コロナ禍の影響のもとで、キャンパスの風景は激変した。なにより人がいなくなったのだから。学生たちの熱気に満ちていたキャンパスは、まるで廃墟のように静まり返った。それを目の当たりにして、未曾有の危機の深刻さを人びとは痛感したことだろう。ただ、人混みも熱気も苦手なわたしは、その静けさを密かに味わう毎日を送っていた。そんなある日、日本庭園で昼食をしていると立派なアオダイショウと遭遇した。あまり知られていないが、キャンパスには昔から蛇が棲みついている。日頃は草陰や石垣の隙間に身を潜めているので、姿を見ることは稀だろう。コロナ禍で人間がステイホームを決め込む中、キャンパスの生き物たちにとって、棲息環境はにわかに望ましいものになったに違いない。なにせ一番の厄介者が姿を消したのだから。偶然訪れた安息の日々を満喫するかのよう、蛇はベンチに座るわたしの横を滑るように通り過ぎると悠然と草むらへと姿を消した。

自然との出会いに満ちた思い出深い池内記念館は、もうそこにはない。古い建物が壊され新たな施設が建つのは、手狭なキャンパスでは避け難いことだ。だが、その土地に刻まれた数々の出来事の歴史は、たとえモノが消えたとしても、どこかで／だれかが／なにかのかたちで引き継がねばならない。『学院史編纂室便り』とは、そうした使命を担う貴重な媒体ではないだろうか。今回幸運にも寄稿の機会を与えていただき、そんなことをふと考えた。

(あべ きよし)

